郊外都市横断スタディーズ

Cross-sectional Studies of Suburban Cities

首都大学東京　郊外型都市賦活更新プロジェクト研究

首都大学東京では、2010年より東京の郊外を対象とした研究を行っています。
都市環境科学研究科に所属する6人の研究者と現場で活躍する3人の専門家、
そして様々な専門領域で学ぶ13名の大学院生がチームを組み、1年間かけて
さまざまな視点から研究を行ってきました。このレポートはその研究成果をまとめたものです。
都市の郊外での生活や空間はきわめて単調である、と考えられがちですが、
そこには様々な課題と様々な可能性が隠されています。
この調査研究ではその実相に少しでも迫ろうと考えました。
ご一読いただき、ご意見やご感想などをいただければと考えています。

郊外をどう調べ、どう理解するか？

饗庭伸
都市計画・まちづくり、
首都大学東京　都市システム科学域

都市のまわりに形成された、いわゆる「郊外」、この場所をどう捉えたらいいのだろう、このような素朴な疑問から、この研究はスタートしている。かつて都心の人口が激減する「ドーナツ化現象」が問題になったように、もはや、都市の人口の多くは郊外に居住している。そこに住んでいる人がどういう風に生活し、そこで何が必要とされているのか、このことを正確に見極めることは、日本の都市の将来像を見極めることにつながる。

日本の郊外は世界的に見ても不思議な空間である。例えばアメリカのように、自動車移動を全ての前提とはせず、特に東京をみると、多くの郊外は公共交通による都心への通勤を前提としている。それなりに複合した、高機能な空間がそこにある。あるいは急速に成長した大都市の周辺に必ずといってもいいほど形成される、いわゆる「スラム」も日本の郊外には存在しない。東京の環状7号線の近辺に広がる、木造住宅の密集エリア-都市計画の世界では「木密ベルト」と呼ばれる-は、都市計画制度のコントロールが十分にはたらかなかった、という点で「スラム的」であるかもしれないが、劣悪なスラムの環境とは程遠い。

ではこの「郊外」を捉える、理解するにはどうすればいいか。郊外はまず第一に広すぎる。直感的に理解することが難しいし、全てを調べることがそもそも難しい。ものごとを調査し理解する方法には「帰納法」と「演繹法」がある。郊外が広すぎるという限界はあるが、帰納的なアプローチは、郊外をシラミつぶしに調査し、実態を把握することである。演繹的なアプローチは、郊外をつくり出したメカニズムを明らかにして、郊外を描き直すことである。そしてもう一つの方法として、郊外で起きている特別な現象を見つけ出し、その現象から類推（アナロジー）することで、郊外に対する認識を組み直すことがある。

この研究では、まず第一に社会調査によって、帰納的に郊外の姿を描き出そうとした。ついでまちづくりの動きのある「シネマストリート」という地域に注目して、類推的に郊外の姿に迫ろうとした。二つのアプローチ、その成果は十分なものではないと自覚しているが、2010年の郊外を出来るだけ正確に描こうとした、その報告としてお読みいただければ幸いである。

現在そしてこれからの郊外生活を考え、読み解くために

山本薫子
都市社会学／地域社会学／社会調査、
首都大学東京　都市システム科学域

近年、若者の「地元志向」が強まっているという。近年、郊外のターミナル駅の周辺開発が各地で行われているが、そうしたことも要因として挙げられるかもしれない。

私たちの問題関心は、東京の郊外で生まれ育った若者たち、いわば「郊外第二世代」はどこにいるのか、という疑問から始まった。自分の代で郊外に移り住み、子育てを終えた郊外第一世代が60歳代、70歳代となった今日、若者や子育て世代は現在どのような暮らしをし、将来どこで、どのような生活をしたいと考えているのだろうか。

かつては基地の街として栄え、現在にいたるまで多摩地域の中心地として発展してきた立川。そのなかでも高松町・曙町地区は、ターミナル駅に近く、利便性に惹かれて移り住む人が多いと同時に、祖父母の代から同じ土地で暮らし続ける家族もいる。最近では空き店舗を活用した新しいビジネスも生まれている。郊外第二世代が生まれ育った場所に戻ってくるために何が必要か、また他から転入する人たちは地域に何を求めているのだろうか。そうしたことをこの場所を通じて考えていきたいという理由から、2010年8月に約2,000人を対象としたアンケート調査を実施した。

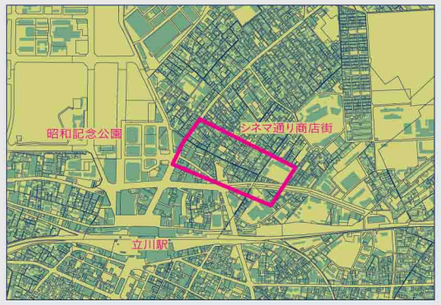
詳細なデータ分析は今後進めていく予定であるが、以下では回答の全体的な傾向についてまとめておきたい。まず、全体的な傾向として定住意識が高いことが挙げられる。特に、近隣に特に親しい友人・知人がいなくても住み続けたいと考えている人が一定数いることがわかった。その背景としては、立川駅に近接し商業施設も多いといった利便性が高く評価されているようである。生まれ育った人々だけでなく、他所から転入した人々にとっても「住みやすい」と思える地域といえるだろう。いっぽう、自由回答では「年をとったらもっと静かな場所で暮らしたい」という意見も目立った。

今後は、アンケート結果を参考にしながら、地域のなかで積み重ねられてきた記憶や経験、住民の地域に対する思いなどを個別のインタビューでうかがい、この地域の「これまで」と「これから」をつなぐ作業をしていきたいと考えている。地元の方々が地域の将来像を検討していく際の参考資料となれば幸いである。

PURPOSE

1

調査研究の主旨と目的



首都大学東京では2010年度より「郊外型都市賦活更新プロジェクト研究」と題した研究を行っています。戦後、日本の大都市近郊で急速に形成されたまちは様々な課題を抱えています。そうした課題のうち、特に建築や都市空間に焦点をあて、その「賦活」=「活力を与えること」や「更新」=「新しく生まれ変わらせること」の技術や方法を探る研究です。もちろんそこには、スクラップアンドビルド型ではない新しい方法論をもとめようという視点があります。

研究はいくつかのグループに分かれて行われており、このレポートは「郊外都市の新たな価値を創出する都市建築空間の賦活技術の開発」という研究グループの成果です。このグループは、大学の中だけではなく、実際の郊外のまちの中にフィールドをおき、現場で起きていることと連携をとりながら、実践的に都市や建築の空間をつくり出していくことを目的としています。調査と研究は、大学院生を対象とした講義と連動して行われており、総勢13名の大学院生と、教員、外部からの非常勤講師が力をあわせて取り組んだ研究成果がここにまとめられています。

「郊外型都市賦活更新プロジェクト研究」は、2012年度まで続けられます。このレポートは1年目の中間的な成果を、ラフな形でまとめたものであり、お読みいただいた皆様には、是非ともご感想やご意見をお聞かせ頂きたく考えています。いただいたご意見を、来年度以降の研究にフィードバックして、更に現実的な、そして問題解決に役立つ研究につなげていきたいと考えています。

郊外都市の中で どこをどのように 対象にしたか

東京を中心とする郊外は千葉、茨城、埼玉、神奈川県のエリアにまで及び、非常に広大ですが、研究の対象地として東京の西郊、特に立川市、八王子市、日野市、国立市を中心としたエリアを選びました。しかし、絞り込んだとしてもこれらのエリアはまだ広大です。もっと一カ所に集中し、地域を限定して研究を行うべきではないか、という声が聞こえてきそうですが、「郊外」の特徴は、まずもって「広いこと」です。都心のように可能性や課題が一カ所に集中するのではなく、郊外ではその可能性や課題が広い範囲に低い密度で存在するのではないか?と考えたため、このような広いエリアを対象としています。

たとえは悪いのですが、この広いエリアのあちこちに釣り糸を垂らしてみて、何が捕まえられるだろう、という構えで研究の対象地を決めたわけです。

さて2010年は、研究の対象地の中で、主に立川の「シネマ通り商店街」のエリアにフォーカスをあてて研究を行いました。シネマ通りの場所は地図に示してあります。この周辺地域では「東京ウエッサイ」というコミュニティ FMを活用した取組みがすでに始まっており、すでにこの取組みを起点としたいくつかのプロジェクトが実現しています。そこで、東京ウェッサイのメンバーにも講師になっていただき、先行しているこの取り組みに学びつつ、より深い課題や可能性を掘り起こせないかと考えました。また、このレポートにはまとめていませんが、並行して国立市の谷保での空き家活用のプロジェクトにも研究の一環として関わっています。谷保のプロジェクトについてはいずれ紙面を改めて報告をしますが、面白いことに谷保のプロジェクトとシネマ通りのプロジェクトは(偶然ではありますが)近い関係でつながっています。こうした見えないつながりで「郊外都市」が「賦活」され、「更新」されているのだと、実感をしているところです。

AREA

レポートの構成

このレポートでは2010年に行った3つの調査やスタディの結果を報告します。

1)郊外都市の住民の地域生活に関する調査
(2010年8月実施、10〜11月分析)
郊外に暮らす、普通の住民がどのような生活を行っているのか、アンケート調査によって明らかにしました。 → 2

2)郊外都市の空間に関する調査(2010年6〜7月)
郊外都市の都市空間がどのような空間を持ち、それを人々がどのように使っているのか、シネマストリートを中心に、4つのテーマを立てて調査を行いました。 → 3

3)郊外都市を賦活するプロジェクトの提案
(2010年11月〜1月)
郊外都市を「高齢者」「地方出身者」「農業」「趣味」「アート」の5つの視点から賦活するプロジェクトの企画を提案しました。 → 4

INDEX

講師の紹介 (あいうえお順)

MEMBER

饗庭 伸 〈あいばしん〉
都市計画・まちづくり、
首都大学東京　都市システム科学域

1971年兵庫県生まれ。早稲田大学理工学研究科建設工学専攻修了。博士(工学)。ハードな都市計画からソフトなNPO支援くらいまで。鶴岡市のまちづくりの仕掛けと立ち上げ、あちこちでの空き家再生のプログラムづくり、商店街の情報空間化、まちづくり支援NPOの設立、議会改革の市民運動などに関わる。

門脇耕三 〈かどわきこうぞう〉
首都大学東京　建築学域

1977年神奈川県生まれ。2001年東京都立大学大学院修了。東京都立大学　助手を経て、2007年より首都大学東京　助教。専門は建築計画、建築構法。集合住宅のリノベーションに関する研究などを行うほか、建築の技術開発、設計活動などにも力を入れている。

酒井博基 〈さかいひろき〉
デザイナー　Central Line Inc.

1977年和歌山県生まれ。2002年武蔵野美術大学大学院修了。慶応義塾大学メディアデザイン研究科博士課程では地域メディアを研究。2008年デザインオフィス「Central Line Inc.」を設立。ソーシャルデザインをテーマにコミュニティラジオのパーソナリティーや子供向けのワークショップ開発など、オフィスを飛び出し様々な領域で活動中。

坪本裕之 〈つぼもとひろゆき〉
都市地理学／オフィス研究、
首都大学東京　地理環境科学域

1969年広島県生まれ。広島大学大学院文学研究科中退。博士(理学)。大都市圏というやや大きな空間スケールを前提とし、地域形成の文脈から都市問題をとらえる。成熟期を迎えた郊外の問題には、まずは働く場と住まう場、東京、都市といった地理的な垣根を取っ払い、日本全国さらには世界の地域問題を広く見渡しつつ、居住者の生活を再構築することが大切と考えている。

古澤大輔 〈ふるさわだいすけ〉
建築家、メジロスタジオ共同主宰
http://www.mejirostudio.com/

1976年立川市生まれ。2002年東京都立大学大学院修了、同年メジロスタジオを設立。戸建住宅や集合住宅を中心に、仮設レストランや屋台のデザインまで手がける。「建築をつくることは環境をつくることである」を活動理念に、新しい風景の設計を試みている。「東京ウェッサイ」では「立川空想不動産」を担当し、実際のプロジェクトを通じて郊外のアイデンティティについて考えている。

松本真澄 〈まつもとますみ〉
住居学／建築経済、
首都大学東京　建築学域

日本女子大学住居学科卒業。戦後の住まいと家族の変容の関係を探るため、単身者、女性、高齢者の居住や団地に焦点をあて研究。多摩ニュータウンの生活環境を調査するとともに、高齢者の居場所づくり「ご近所ラウンジ」などに関わる。著書に「奇跡の団地阿佐ヶ谷住宅」(共著)など。

籾山真人 〈もみやままさと〉
経営コンサルタント／株式会社リライト 代表取締役
http://www.re-write.co.jp/

1976年立川生まれ。東京工業大学大学院修了。外資系経営コンサルティングファーム、東京R不動産を運営するSpeac,incを経て、現在に至る。本業の傍ら、「東京ウェッサイ」では、コミュニティメディアを通じた新しい地域活性化の仕掛けづくり、「立川空想不動産」ではシネマ通りの「空き店舗」を活用した新たな地域の拠点づくりに取り組む。

山本薫子 〈やまもとかほるこ〉
都市社会学／地域社会学／社会調査、
首都大学東京　都市システム科学域

1973年小金井市生まれ。東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得退学。博士(社会学)。山口大学講師、准教授を経て、2008年より現職。横浜を中心にフィールドワークを行い、都市インナーエリアの社会構造変容とその過程について調査研究。また、山口県内の旧産炭地域におけるフィールドワークも実施。著書に「横浜・寿町と外国人」など。

若林芳樹 〈わかばやしよしき〉
都市地理学／行動地理学／ GIS、
首都大学東京　地理環境科学域

1959年佐賀県生まれ。広島大学大学院文学研究科博士後期課程退学後、東京都立大学、金沢大学を経て現在に至る。これまでおもに都市における人間の空間的行動と空間認知の地理学的研究を手がけてきたが、最近は地図や地理情報システム(GIS)の都市問題、参加型まちづくりへの応用に関心がある。

調査研究に携わった学生

江口百合恵／荻野太雅／小森谷奈月／近藤瑞希／齋藤利行／鈴木綾子／王田隆之助／新原昇三／布川悠介／元神理明／八隅裕介／山崎健太郎／尹美眞

以上、全て首都大学東京都市環境科学研究科大学院生

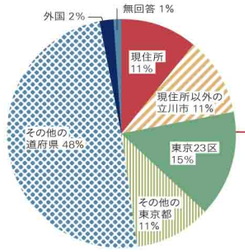
RESEARCH ON LIFE OF RESIDENTS IN SUBURBAN CITY

2

郊外都市の住民の地域生活に関する調査

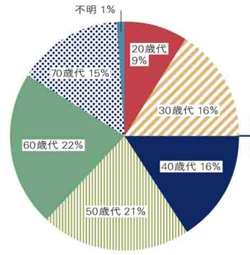
【調査概要】
2010 年 8 月に立川市内に居住する20〜79 歳の男女を対象としたアンケート調査を実施しました。調査対象地域は、立川市高松町 2 丁目、3 丁目、曙町 2 丁目、3 丁目のうち「高松通りより東側、かつ緑川通りより北側」の範囲としました。住民登録者名簿をもとにランダムサンプリング(無作為抽出)を実施し、2,002 人を抽出しました。アンケート用紙の配布・回収は郵送を用い、有効回答数は542(男性 42%、女性 57%、不明1%)でした。本調査実施にあたっては立川市個人情報保護審議会、首都大学東京研究安全倫理審査委員会の審査、承認を得ています。本調査にご協力いただいた皆様に深くお礼申し上げます。

01 出身地はどこですか?



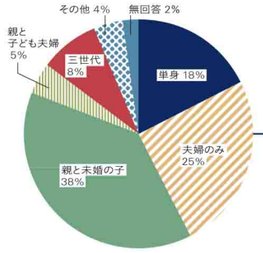
現住所を含む立川市内出身者が全体の5分の1以上を占め、東京都出身者と東京都以外出身者がほぼ半数ずつとなりました。東京都出身者以外を道府県別にみると北海道出身者が最多となりました。

02 何歳ですか?



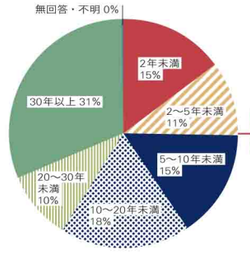
アンケートは各年代の人口比に合わせて配布しましたが、全体的に20歳代、30歳代からの回答率は低く、50歳代、60歳代からの回答が全体の4割以上を占めました。

03 誰と暮らしていますか?



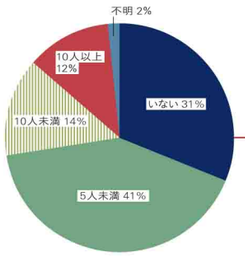
全体の4割近くが親と未婚の子どもからなる世帯でした。また、夫婦のみの世帯も全体の4分の1を占めました。一人暮らしをされている方(単身者)も全体の2割近くとなりました。

04 ここに何年暮らしていますか?



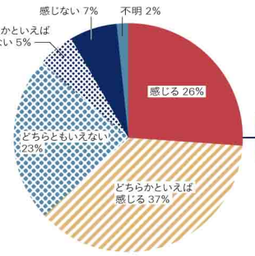
全体の4分の1が居住年数5年未満であると同時に、30年以上お住まいの方も3割以上を数えました。比較的居住年数の短い方と長年お住まいの方の両方が混在してお住まいになっている地域だといえます。

05 近所に親しい人はいますか?



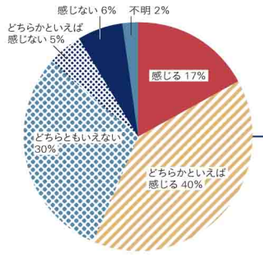
全体の4割の方は、近隣に親しい友人・知人を数人程度(5人未満)お持ちのようです。いっぽうで、そうした友人・知人が地域にいない方も全体の3割を数えました。

06 地域に誇りや愛着を感じますか?



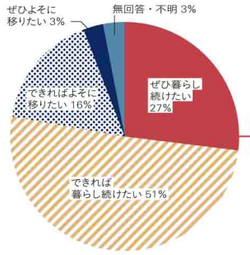
「感じる」「どちらかといえば感じる」を合わせると、全体の6割以上の方が地域への誇りや愛着を感じているようです。全体としては地域への居住年数が長いほど地域への誇りや愛着を感じる方が増える傾向にあります。

07 地域のために役に立ちたいと思いますか?



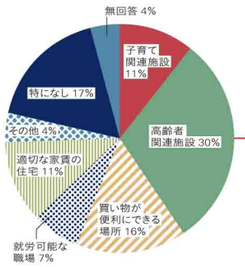
「感じる」「どちらかといえば感じる」を合わせると、全体の6割弱の方が地域になにか役立つことをしたいと思われているようです。特に、地域内および近隣でお仕事をされている方に地域への貢献意識が見られました。

08 この地域で暮らし続けたいですか?



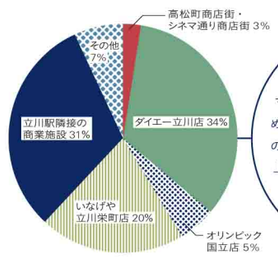
「ぜひ暮らし続けたい」「できれば暮らし続けたい」を合わせると、全体の8割近くの方が地域での定住意識をお持ちのようです。その理由としては、さまざまな施設が隣接し、交通機関も充実していることによる生活の利便性、近隣の友人・知人との良好な関係をあげる方が目立ちました。

09 この地域に必要な施設は?



年代によって回答が分かれましたが、子育て世代は子育て関連施設、中高年以上の世代は高齢者関連施設をあげる方が目立ちました。また、特に必要な施設がないと回答された方も2割近くいました。

10 食料品はどこで買いますか?



近隣のスーパーマーケットの利用者が6割近くを占め、また立川駅に隣接する商業施設の食品売り場で購入する方も3割以上となりました。逆に、地元の商店街を利用する方は少数でした。

3

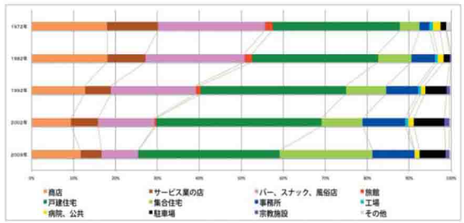
SPATIAL STUDY OF SUBURBAN CITY

郊外都市の空間に関する調査

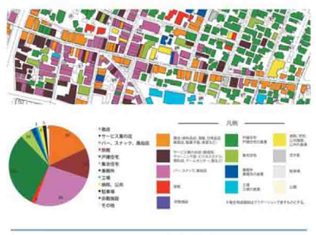
シネマストリート（シネマ通り商店街）を中心に、
都市空間の構成や使われ方に関する調査を行いました。

調査１　シネマ通り商店街の商店構成はどう変化してきたか？

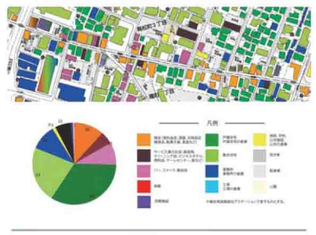
サービス業、バー、スナック、風俗店、旅館、工場の割合が年々減少している。逆に集合住宅、事務所、駐車場は増加している。立川通り側は大規模な建物への更新が進み、第二小学校側ではあまり区画の変わらない建物が多い。ホルモン屋さんや、サムライキッチン(おでん)、など、この数年でまた新たな形態の商店が増えている。それらの新たな動きをうまく取り込みつつ、これまでのシネマストリートの良さを活かすことが出来れば、周辺に人が十分に居住している地域である事から、シネマストリートの活性化を図る事は可能である。



(1)1972年

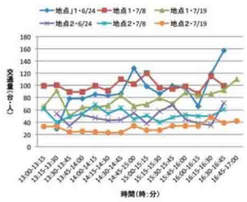


(5)2009年



調査２　シネマ通り商店街の交通流は？

活性化の最も単純な方法は、「人を呼び込み、利用してもらう」こと。
調査地点を2ヶ所定め、シネマストリートの交通の流れを把握した。

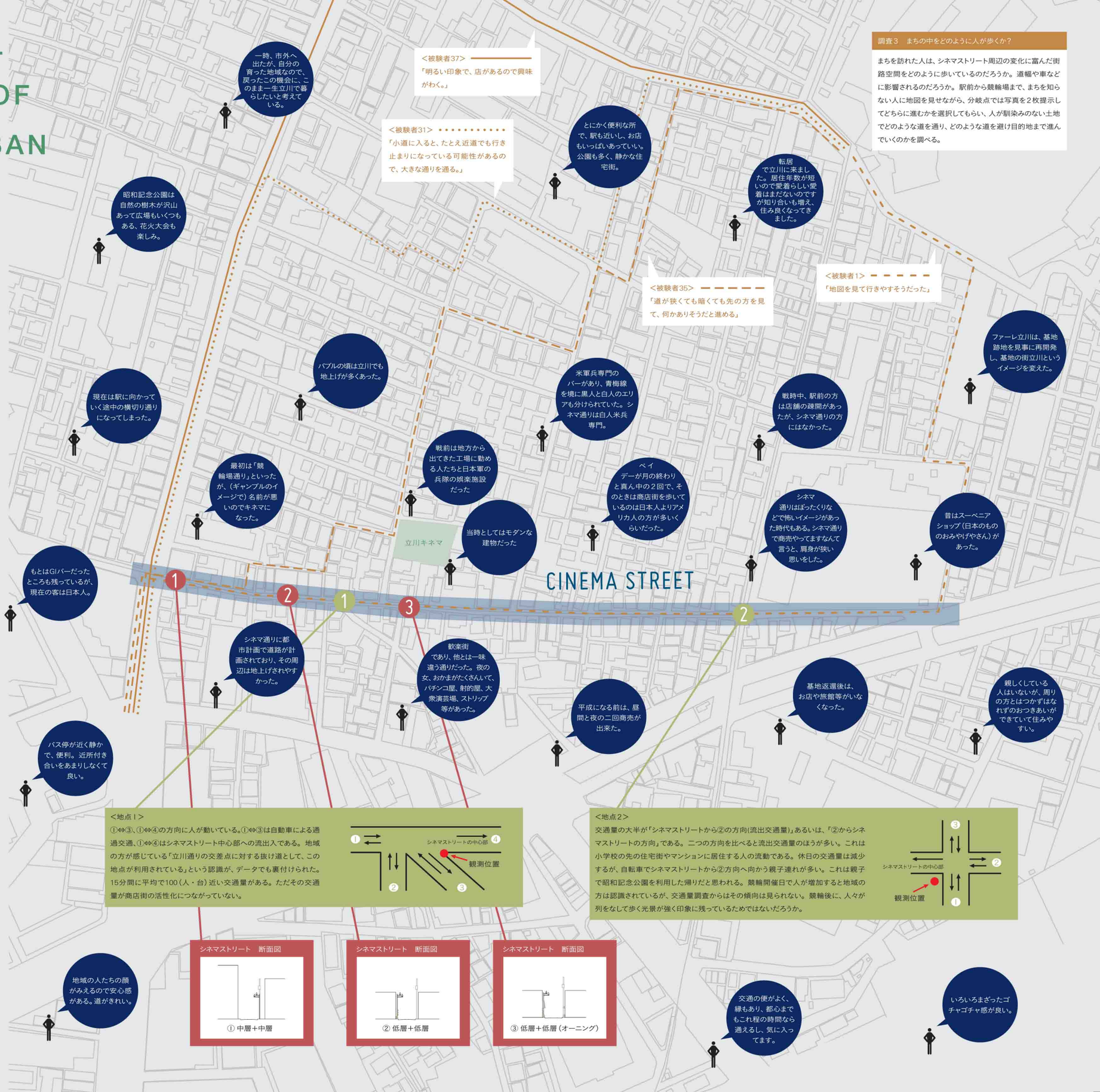


調査４　立川における街路の構成要素に関する分

シネマストリートの詳細な平面図、連続立面図、街路と水平方向断面図、
街路と垂直方向断面図を作成し、空間を詳細に把握する。

調査３　まちの中をどのように人が歩くか？

まちを訪れた人は、シネマストリート周辺の変化に富んだ街路空間をどのように歩いているのだろうか。道幅や車などに影響されるのだろうか。駅前から競輪場まで、まちを知らない人に地図を見せながら、分岐点では写真を２枚提示してどちらに進むかを選択してもらい、人が馴染みのない土地でどのような道を通り、どのような道を避け目的地まで進んでいくのかを調べる。



一時、市外へ出たが、自分の育った地域なので、戻ったこの機会に、このまま一生立川で暮らしたいと考えている。

<被験者37>
「明るい印象で、店があるので興味がわく。」

<被験者31>
「小道に入ると、たとえ近道でも行き止まりになっている可能性があるので、大きな通りを通る。」

とにかく便利な所で、駅も近いし、お店もいっぱいあっていい。公園も多く、静かな住宅街。

転居で立川に来ました。居住年数が短いので愛着らしい愛着はまだないのですが知り合いも増え、住み良くなってきました。

昭和記念公園は自然の樹木が沢山あって広場もいくつもある、花火大会も楽しみ。

<被験者35>
「道が狭くても暗くても先の方を見て、何かありそうだと進める」

<被験者1>
「地図を見て行きやすそうだった」

ファーレ立川は、基地跡地を見事に再開発し、基地の街立川というイメージを変えた。

バブルの頃は立川でも地上げが多くあった。

現在は駅に向かっていく途中の横切り通りになってしまった。

米軍兵専門のバーがあり、青梅線を境に黒人と白人のエリアも分けられていた。シネマ通りは白人米兵専門。

戦時中、駅前の方は店舗の疎開があったが、シネマ通りの方にはなかった。

最初は「競輪場通り」といったが、(ギャンブルのイメージで) 名前が悪いのでキネマになった。

戦前は地方から出てきた工場に勤める人たちと日本軍の兵隊の娯楽施設だった

当時としてはモダンな建物だった

ペイデーが月の終わりと真ん中の２回で、そのときは商店街を歩いているのは日本人よりアメリカ人の方が多いくらいだった。

シネマ通りはぼったくりなどで怖いイメージがあった時代もある。シネマ通りで商売やってますなんて言うと、肩身が狭い思いをした。

昔はスーベニアショップ（日本のもののおみやげやさん）があった。

もとはGIバーだったところも残っているが、現在の客は日本人。

シネマ通りに都市計画で道路が計画されており、その周辺は地上げされやすかった。

歓楽街であり、他とは一味違う通りだった。夜の女、おかまがたくさんいて、パチンコ屋、射的屋、大衆演芸場、ストリップ等があった。

平成になる前は、昼間と夜の二回商売が出来た。

基地返還後は、お店や旅館等がいなくなった。

親しくしている人はいないが、周りの方とはつかずはなれずのおつきあいができていて住みやすい。

バス停が近く静かで、便利。近所付き合いをあまりしなくて良い。

<地点１>
①⇔③、①⇔④の方向に人が動いている。①⇔③は自動車による通過交通、①⇔④はシネマストリート中心部への流出入である。地域の方が感じている「立川通りの交差点に対する抜け道として、この地点が利用されている」という認識が、データでも裏付けられた。15分間に平均で100（人・台）近い交通量がある。ただその交通量が商店街の活性化につながっていない。

<地点２>
交通量の大半が「シネマストリートから②の方向(流出交通量)」あるいは、「②からシネマストリートの方向」である。二つの方向を比べると流出交通量のほうが多い。これは小学校の先の住宅街やマンションに居住する人の流動である。休日の交通量は減少するが、自転車でシネマストリートから②方向へ向かう親子連れが多い。これは親子で昭和記念公園を利用した帰りだと思われる。競輪開催日で人が増加すると地域の方は認識されているが、交通量調査からはその傾向は見られない。競輪後に、人々が列をなして歩く光景が強く印象に残っているためではないだろうか。

シネマストリート　断面図

① 中層＋中層

シネマストリート　断面図

② 低層＋低層

シネマストリート　断面図

③ 低層＋低層（オーニング）

地域の人たちの顔がみえるので安心感がある。道がきれい。

交通の便がよく、緑もあり、都心までもこれ程の時間なら通えるし、気に入ってます。

いろいろまざったゴチャゴチャ感が良い。

PROPOSALS TO ACTIVATE SUBURBAN CITY

4 郊外都市を賦活するプロジェクトの提案

郊外都市を賦活するための、5つの提案をまとめました。
これまでの調査から「高齢者」「地方出身者」「農業」「趣味」「アート」の5つの視点を設定し、
それぞれの視点からの提案です。

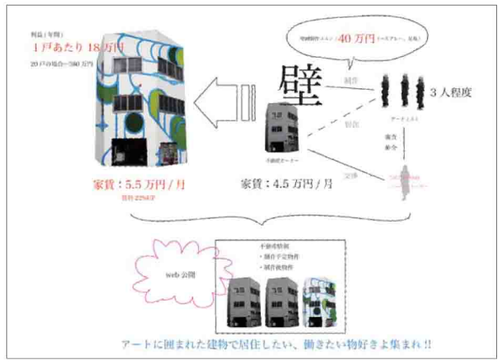
TSUREKOMI ART PROJECT

1. シネマストリートの歴史背景とプロジェクトの目的

かつては「連れ込み旅館」が密集する赤線地帯であった立川シネマストリート界隈。基地返還や駅前開発によって取り残され、衰退している。過去の立川を感じられる空間や場の価値をアートによって蘇らせる。TSUREKOMI ART PROJECTは「まちにアートがひきよせられ、アートがひとをひきよせる。」をコンセプトに、立川シネマストリートとその周辺に住む地域住民とアーティストの架け橋となることで、この場所をもう一度個性ある街へ変えていきたい。

2. TSUREKOMI不動産

具体的な事業内容は、私たちが発見した現在価値を無くしている場所や空間をアーティストに貸し出し、アーティストはその場所でしか成立しないストリートアートを作成する「TSUREKOMI不動産」を軸に展開していく。まずは、貸しビルやアパートなどのオーナーと交渉をして、金銭的な価値の無い場所からキャンバスとしての価値を見出し、間借りをする。住む場所(水平面)ではなく、表現する場所(垂直面、または空間)をアートの不動産として捉える。



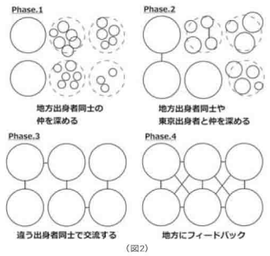
3. TSUREKOMI ART FES.開催

「TSUREKOMI不動産」によって、街にストリートアートが散りばめられてくるのと同時に、シネマストリート発のアーティストの発生を見込んでいる。アーティストが立川をアイデンティティとして持ち、また興味のある住民を取り込むことで、立川の各地でワークショップを展開していく。これらのアート資産を用いて、このシネマストリートでストリートアートによる、アートフェスティバル「TSUREKOMI ART FESTIVAL」を開催することで、立川外の人にもこの場所を知ってもらい、ここを目的として人が集まるような、ありそうでなかった個性的な街を実現する。

TSUREKOMI ART PROJECT

タチカワ日本エア旅行

（図1）



（図2）

1.企画立案理由

立川は半数が地方出身者。住み始めた地方出身者は地域に馴染んでいない、長く住んでいる人は地域に貢献したいと考えている。そこで、両者が長く暮らすための企画を提案する。様々な特色を持った地方の出身者と交流を持ち、文化を知れば、日本一周と同じくらい全国を満喫できる。

2.準備

運営は普段から同郷同士で飲み会を開催している県人会。運営手伝いとして居住歴の長い地方出身者が文化や料理、場所を提供。宣伝・企画の準備段階としてHPを利用(図1)。パスポートも発行可。

3.4つのphaseを設け（図1）、phase1-3を月1回開催。

『1.旅行に行く仲間をみつけよう』

出身地別で飲み会を開催。同じ出身地で仲良くなってもらったり、東京出身者は行ってみたい地方の飲み会に参加する。場所はHPで募集している協賛社の店舗で行う。

『2.「47都道府県にありそうなもの」で皆でできる「何か」をして「地方に何か」をもたらす" かを決めよう』

約10種類カードを用意し、組み合わせるワークショップに参加してもらう。当日不参加でも、HP上で投票を行い企画に立ち会うことも可能（図2）。例えば「特産品」「2つの県で合わせて」「新たな価値を生み出す」であれば、2つの地方を合わせた新たな特産品決定戦となる。

『3.それぞれの旅行先で対抗戦をしよう』

2で決めた事を行い、群馬vs栃木などの小範囲から、四国vs中国地方のような大範囲、その地方では肩身が狭い県同士で集まり親近感を感じさせる等、様々な組み合わせが可能。

『4.旅先にお礼をしよう』

皆で、2で決めた地方にもたらす「何か」を実行する。また個人として、興味の持った地方にエアではなく実際に足を運んでみる。以上の様な流れで行うことで、東京出身者・地方出身者・立川・地方・県人会にそれぞれメリットが生まれるのである。

素人カフェ

1.素人カフェとは

ハイスペックなキッチンを備えたフリーレンタルカフェスペース。料理サークルによるカフェ運営と、時間貸しレンタルスペースから構成される。

2.素人カフェの狙い

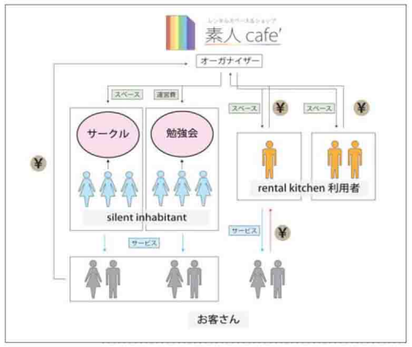
立川にルーツを持たない立川の住人は、地域活動においてなかなか表にでてこないが、高学歴、知的好奇心旺盛、自らのライフスタイル形成に意欲的などのポジティブな特徴も持っている。

今まで埋もれていた人々の欲求を満たしながら地域の表舞台にたたせ、その他の人にもお店の空間を貸し出し、地域の多くの人々が空間を共有することで、誰もが地域に根付き、地域を使い、地域を楽しめるようにすることを目指す。

3.素人カフェのコンテンツ

・school cafe

「今まで表に出てこなかった人」のニーズに合った料理教室/サークルを組織し、サークル活動をしつつその成果物をお店として提供してもらうカフェ。サークル運営費は全体のオーガナイザーが負担し、サークルには無料で参加できるが、収益は素人カフェが得る。6サークルが月に2回、合わせて週に3回の開店を目指す。素人カフェのidentityとなる核コンテンツ。



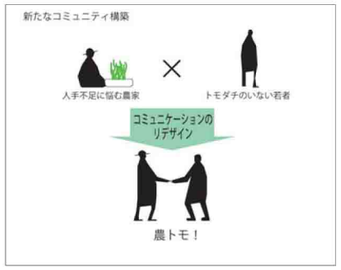
・rental kitchen

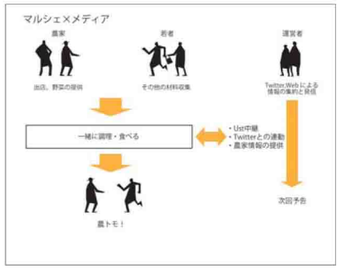
school café開店時以外の業態である、ハイスペクなキッチンを備えた時間貸しレンタルスペース。利用目的は、個人で開くカフェやバー、フリーマーケット、地域にあるサークルの活動場所など、特に限定しない。家ではできない行為を実現させ、なおかつ地域に開くことのできる場所となる。

school caféによって地域に埋もれていた人を表舞台にたたせ、rental spaceによって自己実現とまちをつかうことを化膿しに、個々の個性が日替わり、時間代わりでお店としてまちに現れる。地域の人の個性が空間に現れる場所が、この素人カフェである。

農トモ Project.

付近に偏っており、駅周辺で買い物をする若者は知る機会がない。駅近くで定期的にマルシェを開き、もっと若者の目に留まるようにTwitter やUstream などを使って、メディア化する工夫をする。マルシェを日常のエンターテイメントとして表現することによって、若者がメディアを通じて反応しやすい仕組みとする。開催場所は都市のスキマ。具体的にデパートの屋上や空き駐車場、都市の中の使われていない場所を利用する。野菜の販売と同時に、農家と若者が協力して材料を集め料理を作る。野菜は農家が提供し、足りない具材は若者が集める。材料が集まり次第料理し、一緒に食べる。目の前にいる農家の人が作った野菜を、一緒に食べるのは何よりの食の安心である。運営者は常時Web を通じて立川農業の情報を集約し、情報発信を行っていく。将来的に、マルシェの参加者が賛同し、運営者になることを期待している。





〈地域の食への安心を地域でサポート〉

都市農家の人手不足と地域に友達のいない若者。農業と情報ツール、相互の得意を掛け合わせ、地域の食への安心を地域でサポートするコミュニティ構築のためのプロジェクト。立川の農業の現状と地域のコミュニティ軽薄化の問題を踏まえ、農トモという新たなコミュニティを構築するために農をエンターテイメントとして表現し、若者が反応しやすい仕組みを提案する。

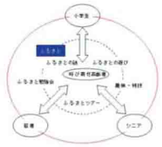
〈農トモの定義〉

マルシェをメディア化するなど、地域の食の安心をサポートするシステムを、若者のエンターテイメントとしてすることで形成される、新しいコミュニティのカタチ。

〈マルシェ × メディア〉

農家は日頃それぞれの畑の近くで直売所を開いているが、それらの殆どが砂川

【ターゲット間の関係図】



ふるさとが作る家

〈テーマ〉

「呼び寄せ高齢者」とは、高齢になり夫（妻）に先立たれたなどの理由から住み慣れた故郷を離れて、都会の子どものもとに移り住んでいる高齢者のことをいう。現代都市では、呼び寄せ高齢者の問題として、子供への負担、新たな環境への適用問題、地域社会の変化などが挙げられる。今回はこの問題を抱える立川市で解決策を提案する。

〈プロジェクトで目指すこと〉

① 呼び寄せ高齢者が自立して暮らす場"House"をつくる

② 呼び寄せ高齢者のふるさと"Home"の魅力を再発見する

③呼び寄せ高齢者の力を活かす場をつくり、多世代同士をつなぐ

〈事業内容〉

1.呼び寄せ高齢者用共同住宅事業

同じ境遇の高齢者が集まって生活する場をつくる。時間軸によりショートステイ、ロングステイなどを行う。

2. 不動産事業 / ふるさと持ち家活用事業

呼び寄せ高齢者のふるさとの持ち家を活用し、週単位で貸し出す事業を行う。また、呼び寄せ高齢者自身に持ち家やふるさとの良さをアピールしてもらい、若者をふるさとに呼び込むプログラムを実施する。

3.ふるさと紹介事業

不動産屋の一角を、呼び寄せ高齢者自身がふるさとを切り口に自発的活動を行えるスペースとして開放する。

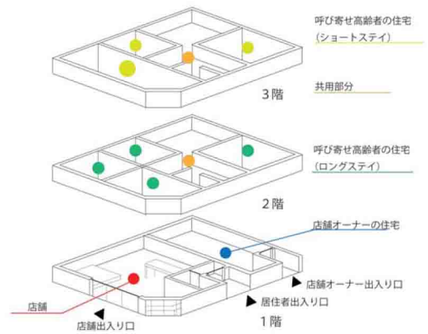
ふるさと物産コーナー（ふるさとバイヤー）/地域交流コーナー（ふるさとお話隊）/ふるさとツアーの企画、地元小学生との交流など

〈期待できる効果〉

① 呼び寄せ高齢者自身、自立した生活の選択が可能になる。

② ふるさとを題材としたプログラムにより、呼び寄せ高齢者とふるさとが立川に居ながらつながりを持つことができ、生きがいにつながる。

③ 地域との連携やジェネレーションミックスにより、シネマストリートに新たなアクションが生まれる。



FIELD REPORT FROM SUBURBAN CITY

郊外現場レポート 5

研究を進める中で連携をとったり、協力をいただいたりした、郊外都市での具体的な動きをまとめました。

1.東京ウェッサイ

社会的にも意義があり、ユニークな取り組みをしているのに、発信する場所がないと感じている人。「同じ想いを持って、活動している人がいるんじゃないか？」そう思いながら、それぞれバラバラにプロジェクトに取り組んでいる人。

そういった想いを広く発信する場所、そして同じ想いを持った人たちに出会いの場所を提供したい。「東京ウェッサイ」は、そうした考えからスタートした、コミュニティFMを使った新しい取組みです。

「東京ウェッサイ」とは、TOKYO WEST SIDE」、そう「東京の西側」という意味。戦後、東京のにしがわはベットタウンとしての機能を果たし、近年より利便性は高まりつつある一方で、どこも同じような街になってしまったのではないかと思います。街並みはもちろん、地域文化やアイデンティティのようなものも同時に失ってしまったと言えるかもしれません。

みんなの想いがいつか形となり、東京の西側から新たなカルチャーを発信していきたい。「東京ウェッサイ」という名前には、そうした願いが込められています。

2.シネマ通り（シネマ通り商店会）

立川駅北口から歩くこと数分、大通りから一歩足を踏み入れると、「シネマ通り商店会」という、３５０メートル程度の小さな商店街があります。

シネマ通りという名前の由来は、かつてこの商店街に映画館があったことから名付けられたそうです。まだ立川に米軍基地があった頃は、シネマ通りは基地ゲートの目の前に立地していた飲み屋街としても、大変な賑わいを見せていた時代もありました。

その後、立川基地が返還されたことや、立川駅周辺の再開発が進み徐々に人の流れが変化したこと、商店主の高齢化などに伴って、かつては賑わった商店街も、現在ではシャッターを閉めたままとなっている建物も少なくない状況です。

4.谷保プロジェクト「やぼろじ」

国立市谷保で活動している、都市農とコミュニティの再生をはかるプロジェクトです。地域で活動する市民の組織、建築家、大学生、大学研究室が協働し、放棄農地の再生、空き家の再生などに取り組んでいます。谷保は江戸時代よりの歴史のあるエリアであり、近隣には谷保天満宮や茅葺きの農家が残り、古くからの人のつながりも残っています。一方で計画的ではない農地の宅地化が個別散在的に進み、小さな道路と農地が入り組む迷路のような空間が作られています。プロジェクトでは地域のこうした状況を丁寧に読み取り、様々な人のつながりを形成しながら、空き家となっていた、昭和30年代につくられた住宅をシェアハウス、シェアオフィスとコミュニティカフェの複合拠点として再生しています。

3.「立川空想不動産」シネマ通りプロジェクトについて

そんなシネマ通りは、かつて賑わっていた時代の情緒を残す物件がいまだ数多く残るエリア。よくも悪くもそれは、立川に残る唯一の立川らしさでもあります。しかし、このまま中心市街地の空洞化に歯止めが効かなければ、それらはマンションとなり消えていくのです。いわゆる懐古主義的に建物や街並みを残すのではなく、雰囲気を残しつつ、使い方を変えることで新しい価値を付加はできないだろうか？　「立川空想不動産」シネマ通りプロジェクトは、そうした想いからスタートしました。

調査にご協力をいただいた皆様

1.株式会社 なかやま不動産

賃貸・仲介・管理、不動産コンサルティング業務等を行っている地域密着の不動産屋である。親身な接客が印象的であり、新規居住者（特に、高齢者）に関しては業務内の関係のみならず、賃貸住宅紹介後も地域の生活に関することなどで頼られることもしばしばあるそうだ。

2.立川市　福祉保険部　高齢福祉課

高齢者を対象とした事業や相談、福祉会館やシルバー大学などに関することを行っている。高齢者の住宅に関しては在宅支援係が対応している。他の福祉機関と連携しており、統計は市役所内で閲覧できる。

3.地域包括支援センター

高齢者の支援・相談を中心となって行っている機関で、市内6か所に設置されている。その他の事業として、介護予防、高齢者の権利擁護などを行っている。高齢者の生活実態に詳しい。

4.立川市 産業文化部 産業振興課 産業振興係

商業、工業、農業をはじめとする市内の産業全般に渡る振興を行うとともに、まちの魅力を発信する観光の振興を行っている。また、働きたい人への就労支援や中小企業で働く人への勤労者福祉支援、中小企業を対象とした事業資金の融資あっせん等の業務も行っている。

5.たちママ探検隊

2006年に市民、企業、行政との子育て支援協働事業として生まれた団体。一般公募により集まった立川市在住の小さな子どもを持つ母親たちによって構成され、商店街等の地域情報を母親目線で紹介する「子育て応援たちかわマップ」を作成している。母体には、立川の子育てを応援する市民団体「夢たち応援団」がある。

6.NPO法人育て上げネット

立川市高松町で活動する、コミュニケーションが苦手、働くことが不安、やりたいことが見つけられない・・若者たちとその保護者、関係者に対して様々な形をサポートを実践するNPO。若年者就労支援事業、企業連携事業、保護者支援事業、キャリア教育事業、官公庁ソリューション事業などを展開。

郊外都市横断スタディーズ

発行：首都大学東京　都市環境科学研究科　饗庭伸
東京都八王子市南大沢１－１　aib@tmu.ac.jp
アートディレクション：room-composite　カイシトモヤ
デザイン：room-composite　酒井博子　柏岡一樹
印刷：Soundgraphics
発行月　2011年3月

この報告書は首都大学東京リーディングプロジェクト「環境負荷低減に資する都市建築ストック活用型社会の構築技術／ Ⅲ.郊外型都市賦活更新プロジェクト研究」の一環として行われました研究成果をまとめたものです。また、講義は首都大学東京都市環境科学研究科の学域横断型講義として取り組まれました。

この印刷物は、古紙配合率70%の再生紙、石油系溶剤を含まないインキを使用しています。